

青年部・女性部

マイタウン子どもビジネススクール

「店頭も教育の場」を目指して七年目

長崎県長与町商工会女性部

長与町の主要な産業は農業で、特に二〇〇年余の歴史を誇るみかんの産地として有名です。首都圏など全国で「長与みかん」として高い人気を誇っています。また、わが町には

四つのJRの駅と四年制の県立長崎シーボルト大学があり、幼稚園から大学まで揃った文教の町として基盤が整っています。かつての純農村地帯の町も、現在では自然環境を含めた地理的好条件や下水道事業（普及率九八・六％）などの住環境整備の進展も進み、「住みよい街」として急速に都市化が進んでいます。

これまで、大型店の寿屋に隣接する二つの市場が長与町の商店街の「顔」として長らく活況を呈してきましたが、相次ぐ郊外大型店の進出や消費者ニーズの変化などもあり、バブル崩壊後は、核店舗であった寿屋が撤退、大きな吸引力を失った商店街は衰退の一途をたどり、かつて賑やかだった商店街の面影はなくなっています。

こうした折、長崎県では県民運動として子供の心を健やかに育むためには、大人のあり方を見直し、できることから行動する「ココロねっこ運動」をスタートさせました。県商工会連合会でも「ココロねっこ運動」との「学社連携」活動を推進するため、平成十三年度からマイタウン子どもビジネススクール事業を実施。この事業は、若手後継者等育成の一環として、①子供たちにマイタウン（わが町）の特産品や基幹産業を認識させ、職場体験学習を行うことで、地域が一丸となって子供たちの健全な育成を図るとともに、②地元の商店・事業所を身近なものに感じてもらう、「地域に貢献できる商店・商工会」づくりを目的に実施されています。

地域社会は、子供たちにとって多様な遊びと学習の場ですが、現実的には都市化、核家族化、夫婦共働きなどによる家族の孤立化の進行がある中で、長与町商工会女性部では、活気のなくなった商店街の活性化と子供たちの健全育成、地域で商工会の存在意義を示せる絶好の機会ととらえ、加えて「子育てと商売」を結びつけることができるのは女性部であるとの観点から、商店街に近い小学校の六年生を対象にこの事業を実施しました。

初年度は特に、学校や受け入れ事業所への協力依頼や説明、座学（事前研修）の検討などすべてが手探り、とまどいと不安が募るばかりで、特に元気のなくなった商店街から事業への理解と協力を得られるかが、最大の気がかりでした。

学校側とは授業との兼ね合いと安



熱心に聞き入る子供たち



販売に取り組む子供たち

全対策などを重点的に協議し、受け入れ事業所へは女性部長を中心に役員が事業参加への勧誘と実施内容を説明し、一八事業所の協力を得ることができました。

当日の日程や児童の誘導は案外容易に運んだものの、子供たち六六名の名簿作りは、修了証書を発行することもあり、間違いが許されず、学校側と確認作業の連続。事業所の受け入れ人数などを確認し、可能な限り、子供たちの希望に添えるよう体験先を振り分ける必要がありました。学校側の協力を得たおかげで子供たちからは不満の声はあがらず、ひと安心といったところでした。

当日は体験前に、専門講師が「商売のしくみ及び体験の心構え」の座学を行い、特に「いらっしやいませ！ありがとうございます」のあいさつがお客様との交流の第一歩であることを強調。

座学終了後、子供たちは、女性部員の引率のもと、体験先へ移動し、さっそく、八百屋や洋服店などの小売店や大型店での陳列作業や売場係として職場体験。最初、接客に対して子供たちの小さかった声も次第に元氣いっぱい呼び声となり、工夫して売った喜びや「頑張った」と買物客から声をかけられる満足感を十分得ている様子で、加えて、老人施設

でのお年寄りへのお世話や話し相手に夢中な姿の中に、「店頭も教育の場」であるとの確信を得ながら、この事業・企画の原点を見る思いでした。

受け入れ事業所にも意外な効果も見られ、各事業所で体験する子供の姿を一目見るために、家族が出かけきて、たとえば中華料理店では、食事をしたお母さんから「初めて来ました。おいしいですね。また来たいと思います」との感想。この店では、新規の顧客獲得の一助となったに違いありません。市場では、大きな声で呼び込みをする子供たちの元氣な「商売人もどき」の姿を見て、忘れかけていた商売魂に火がつき、「私たちももっと元氣を出して頑張ろう」といった事業所もありました。

このように、子供たちの職場体験を通し、刺激を受けたのは、受け入れ当初あまり期待していなかった受け入れ事業者の方との見方もできます。

事業終了後は、各班の代表者による発表のほか、全員に感想文を書いてももらって、冊子も作成しています。ほとんどの子供が「参加できてよかった。疲れたけどとても楽しかった」と語り、「一生懸命に働くお店の人を見て、自分の親もこうやって自分たちのために働いていることに感謝、親のありがたさ、働くことの大切さ

がよくわかりました」という意見もあり、この体験を通じて、父母に思いを至らせ、思いやりの気持ちを培うものになったと考えます。

平成十七年度から新たな試みとして、環境保護や自然を大切にする心を養ってもらいたいと、生息数が年々減少している大村湾のスナメリ（世界最小のイルカ）の保護のため、洗剤を使わないで食器が洗えるアクリルタワシを女性部で手作りし、子供たちや先生にこの事業への参加記念品として配布しています。

とまどいながら始めたこの事業も今年で七回目を迎えます。実施当初は消極的だった受け入れ事業所も、今では「賑やかで楽しい」「貴重な戦力だ」といった感じで、積極的に協力をいただけるようになり、昨年は受け入れ事業所も三二と増加しています。一昨年からは、体験日当日、来年の対象予定者となる五年生全員が六年生の職場体験を見学するなど、この事業が学校、地域、事業所に深く根づいています。

今後、受け入れ事業所と地域住民が「地域の子供は地域で育てる」という共通意識の醸成を図りながら、地域の子供たちの健全育成はもとより、地元商店街への利用促進に繋がるよう、事業展開を図っていききたいと思っています。